

指導事例 2

「宮に初めて参りたるころ」(枕草子)

1 単元について

講義形式で本文の読解に多くの時間を費やす指導に偏ってしまうと、生徒の古典に対する苦手意識を助長しかねない。本単元では、基礎・基本を定着させる指導を実施した上で、生徒の主体的な活動を促す言語活動を取り入れて指導する。

『枕草子』の中の「日記的章段」は、当時の中宮定子を中心とした後宮の雰囲気や様子を伝える資料にもなっている部分である。時代背景を理解させるとともに、中宮定子との交流を通して表現されている作者のものの見方、感じ方を読み取らせ、作者の人間像に親しませたい。

2 単元の指導目標

- (1)漢字や歴史的仮名遣いの読み、「枕草子」の時代背景、基本的な語句の意味や語法等を理解させる。
- (2)登場人物の行動の意図を考えたり、宮廷生活の様子や登場人物同士の心の交流を本文から読み取らせたりして、作品を読み味わわせる。
- (3)作者の立場で自己紹介文を書くことを通して、作品をより深く鑑賞させる。

3 単元の評価規準

関心・意欲・態度	読む能力	知識・理解
清少納言と中宮の交流の様子から、二人のものの見方、感じ方、考え方を読み取るうとしている。	表現の特徴に注意して、作者の思いを考えながら効果的に音読している。 叙述に即して文章の内容をおおむね読み取っている。 文章に描かれた人物、情景、心情などを表現に即して読み味わっている。	文や文章の組立、語句の意味、用法及び表記などを理解し、語彙を豊かにしている。 時代背景や宮廷生活の様子を知り、清少納言と中宮の交流を理解している。

4 指導と評価の計画（全7時間）

* 努力を要する生徒への手立て

次	時間	学 習 活 動	指導上の留意点	学習活動における評価規準と評価方法
一	1	作品の成立と作者についての理解 『枕草子』の成立年代や内容、作者清少納言の人物像を、便覧等で確認しながら整理する。	シラバスで本単元の学習の目標と活動を確認する。 ワークシートによって確認すべき項目を示す。 * 資料とワークシートとの対応について助言する。	知識・理解 資料を的確に読み取り、内容を理解している。 (ワークシート資料1)
二	2 3 4	本文の内容理解 本文を教師の範読に続いて音読する。 段落ごとに本文をノートに写し、口語訳をノートに書く。 辞書や教師の解説を参考にして、基本的な語句や語法を理解する。	歴史的仮名遣い等、読み誤りやすい部分は注意を促しながら範読する。 * 助言により読みを確認させる。 脚註や辞書を参考にして口語訳をさせる。 * 辞書の使い方や、本文と脚注の対応について助言する。	読む能力 漢字や歴史的仮名遣いを正しく発音して読み通している。 (観察) 読む能力 本文を正しく読み取り、本文に沿って口語訳をしている。 (ノートの記入状況・観察)
三	5 6	5 全体の内容理解 前時までの学習内容の理解度を小テストで確認する。 これまでの学習への取り組みを振り返って、自己評価票に記入する。 6 本文中の会話の部分を抜き出し、誰が誰に対してどのような場面で言った言葉か考える。	まず自力で解かせ、次に教科書・ノート等を参照させ、理解できている所とできていない所を確認させる。 * ノートの見直しと小テストの復習を促す。 小テストの結果とこれまでの学習への取り組みを振り返らせる。 * 面接により学習の方法等を助言する。 ワークシート(資料4)を使って生徒個人に考えさせた後、発表させる。 * 口語訳を示し、内容理解を助ける。	知識・理解 本文中の語句の読みや意味・用法が理解できている。 (小テスト資料2自己採点) 関心・意欲・態度 作品からものの見方、感じ方、考え方を意欲的に読み取り、心情を豊かにしようとしている。 (自己評価票資料3) 関心・意欲・態度 本文中の会話の部分から中宮と清少納言との交流の様子を読み取り、読み味わおうとしている。 読む能力 本文の内容が正確に読み取れている。 (ワークシート資料4)
四	7	内容理解の確認 これまでの学習内容を踏まえ、清少納言の立場で400字程度の自己紹介文を書く。(資料5)	宮廷生活の様子や中宮との交流など、具体的な内容を挙げ、わかりやすい文章になるよう指示する。 * 口語訳を示し、本文の内容を再確認させる。	読む能力 本文に描かれた人物、情景、心情などを表現に即して読み取り、自己紹介文に生かしている。 (自己紹介文)

5 評価規準と評価方法に対する判断基準

「評価規準」は、何をもとにして判断するかという根拠を示すのに対し、「判断基準」は、どの程度まで達成しているかという判断の根拠を示す。「目標に準拠した評価」として示された評価が客観的なものになるように、この判断基準をもとに評価するものである。前ページ「4 指導と評価の計画」中の評価規準は、判断基準のB「おおむね満足できると判断される」状況を表す。なお、ここでは、「努力を要する状況」を表すCの判断基準に代えて、「『努力を要する』生徒への指導の手立て」を記す。

学習活動	評価規準と評価方法	判断基準		
		十分満足できる (A)	おおむね満足できる (B)	(C)「努力を要する」 生徒への指導の手立て
作品の成立と作者についての理解	知理 - ワークシート	資料を正確に読み取り、ワークシートに記入している。	資料を読み取り、ワークシートにおおむね記入している。	資料とワークシートとの対応について助言する。
本文の内容理解	読 - 観察	漢字や歴史的仮名遣いの読みや、古語の意味の切れ目を理解して調子よく音読している。	漢字や歴史的仮名遣いを正しく発音して読み通している。	助言により読みを確認させる。
	読 - ノートの記入・観察	動作の主体や、助詞等を補い、文脈に即して口語訳している。	脚註や辞書等を手掛かりに、前後の関連を考えながら文脈に即しておおむね口語訳している。	辞書の使い方や、本文と脚注の対応について助言する。
全体の内容理解	知理 - 小テスト	本文中の語句の読みや意味・用法がほとんど正しく理解できている。	本文中の語句の読みや意味・用法がおおむね理解できている。	ノートの見直しと小テストの復習を促す。
	関意態 - 自己評価票	Aが4つ以上あり、C・Dがない。	A・Bが合わせて4つ以上あり、Dはない。	面接により学習の方法等を助言する。
	関意態 - ワークシート	本文の会話の部分から、中宮と清少納言の交流の様子を読み取り、読み味わおうとしている。	本文の会話の部分から、中宮と清少納言の交流の様子をおおむね読み取り、理解しようとしている。	口語訳を示し、内容理解を助ける。
	読 - ワークシート	本文の内容が正確に読み取れている。	本文の内容がだいたい読み取れている。	口語訳を示し、内容理解を助ける。
内容理解の確認	読 - 自己紹介文	本文の内容を的確に読み取り、紹介文を書いている。	本文の内容を大体読み取り、紹介文を書いている。	口語訳を示し、本文の内容を再確認させる。

6 成果と課題

(1) 成果

ワークシートや形成的評価による学習内容の定着及び指導の改善

第1時「作品の成立と作者についての理解」の指導では、資料を活用してワークシートにキーワードを記入させることで、学習内容の定着を図った。ワークシートは定期テスト前の家庭学習にも活用され、テスト(資料7)ではこの部分に関する設問の正答率(資料8)が77%に達した。

第2～4時「本文の内容理解」は、前述した一般的な読解の指導である。通常はこの基礎的な指導で単元を終了することが多いが、さらに理解を深めさせるために、第5～6時「全文の内容理解」のための指導として、小テスト、自己評価、会話文に注目した指導を行った。まず、本文中の語句の読みや意味・用法の理解状況を、小テストを用いて生徒自身に把握させた。これにより、何がわかって何がわからないのかを明確に認識させることができ、漠然とわからないという状態を解消させた。そして、理解が不足している点について、生徒の実情に応じて指導助言を行った。小テスト終了後には、それまでの学習への取り組みを振り返らせ自己評価をさせた。また、定期テスト前にも小テストを家庭学習での復習に活用するよう指導した。これらによって、学習内容の定着度(資料8)が向上した。指導者自身も、それまでの指導の成果を小テストを通して振り返り、その後の指導に生かすことができた。

古典に親しませる指導の工夫

古典に親しませるために、第6時では、『読書へのアニメーション75の作戦』の中の、「作戦54 だれが、だれに、何を？」を用いて、会話文に注意して読みを深める指導を行った。第7時では、単元のまとめとして、清少納言の立場で自己紹介文を書くという、言語活動としての「書くこと」の指導を取り入れた。

(2) 課題

評価方法の工夫

第7時の「清少納言の立場での自己紹介文」については、例えば班内で作品を互いに読み合っ、良い点や改善点等について意見や感想を交換する相互評価(資料6)の場面を取り入れると、さらに読みが深まるであろう。また、秀作を数点選んでプリントして配布し、同様に相互評価させてもよい。

評価問題の工夫・改善

単元終了後の定期テストの出題方針は、指導内容を踏まえ、目標に準拠した評価ができることとした。学習活動としては思考力を問う活動も取り入れ、それを踏まえた既習事項としての出題形式としたが、結果的には、「思考」によってよりも、「知識・理解」を踏まえて解答する設問の方が多かった。思考力を問う問題の工夫が引き続き今後の課題である。

また、テストで正答率の低かった、古語の意味を記述させる設問については、出題方法の検討を要する。

参考文献

- ・ M・M・サルト 『読書へのアニメーション75の作戦』 柏書房
- ・ 橋本 治 『桃尻語訳枕草子』 河出書房新社
- ・ 北尾倫彦・金子 守編集 『平成14年版中学校国語 観点別学習状況の新評価基準表』 図書文化社

資料1

清少納言と『枕草子』について

()年()組()番 氏名()

清少納言について

父は []。後撰和歌集の選者。学者歌人の家柄。

十六、七歳のとき []と結婚。男子出産。

()世紀末の()年

夫と別れ、関白 []の長女で []天皇の

中宮であった []のようなく出仕。

清少納言()歳、中宮()歳の時のこと。

()について深い教養があった。

当時ライバル関係の []から、「オをひけらかす」と批判されている。

()はあまり得意ではなかった。

中宮の死去とともに宮中を去り、晩年の生活は明るくものではなかったといわれる。

『枕草子』について

『枕草子』の成立は()時代中期。()文学の祖といわれる。

内容は約三百の章段からなっており、内容上三種類に分けられる。

- [] 的章段 ものづくし。
「虫は」「すそまじきもの」
- [] 的章段 自然や人事の美的世界を描いたもの。
「春は晴」「九月ばかり」
- [] 的章段 十年にわたる宮仕え生活を描いたもの。
「雪のいと高つ降りたるを」「宮に初めて参りたるころ」

人事や自然を、当時としては新鮮な感覚や機知でとらえ()の文学といわれる。

資料2

宮に初めて参りたるころ ()年()組()番 氏名()

()には口語訳を、【 】には漢字の読みを現代仮名遣いで書きなさい。

宮()に初めて参上した頃に初めて参りたるころ、もの恥づかしきことの数知らず、涙も落ちぬげれば、夜々参りて、三尺の御几帳()の後ろにさながら、絵など取り出でて見せさせ給ふを、手手さえも()にてもえさし出づまじつわりなし。「これは、とあり、かあり。それが、かれが。」などのたまはず。高坏()にまゐらせたる御殿なれば、鬢の筋なども、ながなが()よりも顕証()に見えてまばゆけれど、念じて見なす。いと冷たきころなれば、さし出でさせ給くる御手のはつかに見ゆるが、いみじつ句ひたる薄紅梅()なるは、限りなくめでたしと、見知らぬ里人心地には、かかる人そは世におはしましければ、驚()がるまでぞまもり参らする。

暁にはとく下りなむと急がる。「葛城の神もしばし。」など仰せらるるを、いかにかはずちかひ御覽せられ御覽に入れず()にすませたいとむとて、なほ伏したれば、御格字もまゐらず。女官ども参りて、「これ、放たせ給へ。」など言ふを聞き、女房()の放つを、「まな。」と仰せらるれば、笑ひて帰りぬ。

ものな問はせ給ひ、のたまはするに、久しつなりぬれば、「下りまほしつなりにたらむ。せらば、はや。夜さらはとく。」と仰せらる。

ぬり帰るにや遅きと上げ散らしたるに、雪降りけり。登花殿の御前は立()て鄰近()てせはし。雪いとをかじ。昼つかた、「今日はなほ参れ。雪に曇りてあらはにもあるまじ。」など、たびたび召せば、この局の主も、「見苦し。そのみやば籠()らつとするのですか。程に御前を許されたのは、さおほしめすやつにせあらめ。思ふにたがふはにくきもので。」と、ただ急かしに出だしたれば、あれにもあらぬ心地すれば、参るぞいと苦しき。火焼屋の上()に降り積みたるもめづらしつをかじ。

御前近くは、例の炭櫃()に火()にたくおこして、それにはわざと人もあらず。上臈御まかなひ()にさぶらひ給ひけるまに、近()る給へり。沈の御火桶の梨絵したるにおはします。次の間に長炭櫃()にひまなくみたる人々、唐衣()にき垂れたるほどなど、馴()れやすらかなるを見るも、いとつらやまし。御文取り次ぎ、立ち戻、行き違ふさまなど、のつつまじげならず、もの言ひ、笑わらぶ。いつの世にか、さやつに交()ひらひならむと思ふをくそつらまじき。

興寄りて三、四人きしつひて絵など見るもあめり。(第百八十四段)

自己評価票（実際に使用したシートに、回答数、自由記述の記載例を書き加えた。）

年 組 番 氏名	
1 教科書をよく読んだ。	A 1人 B 7人 C 2人 D 0人
2 本文をノートに写した。	A 8人 B 2人 C 0人 D 0人
3 口語訳をノートに書いた。	A 8人 B 2人 C 0人 D 0人
4 口語訳をノートに書きながら内容の理解に努めた。	A 3人 B 3人 C 1人 D 3人
5 発問に対し、自分で考えようとした。	A 5人 B 4人 C 1人 D 0人
6 授業の内容がわかった。	A 1人 B 5人 C 1人 D 3人
反省及び今後の学習への抱負	
・あまり集中していない時があった。 ・まじめにがんばります。 ・今まで以上にがんばります。 ・もっとゆっくり授業を進めて欲しい。 ・もっと教科書を読んで漢字の読み方がわかるようにしたい。 ・内容がわかると楽しいからこれからがんばる。	

A あてはまる B だいたいあてはまる C あまりあてはまらない D あてはまらない

ほとんどの生徒はノートにきちんと口語訳を書いてはいるが、それが精一杯で内容を理解するには至っていない。小テストの結果が不十分だった生徒や、自己評価にCとDを付した生徒など、指導の必要がある生徒には、ノートの見直しと小テストの復習を促した。また、自由記述欄にある生徒の要望を取り入れて、その後の授業での説明や助言をより丁寧にするよう心掛けた。

なお、上の自己評価票の6の項目については、授業の内容の理解が不十分な生徒（CとD）が10人中4人いたが、この自己評価からだけではどの学習内容がわからなかったのか具体的には把握できない。学習活動の内容のまとめりに自己評価させ、よりの確に学習の状況を把握するためには、次のように学習活動を明らかに示した項目で確認する方法が有効と考えられる。生徒の学習状況の到達度は、ペーパーテストによっておおよそ判断できるが、自己評価によってどこがわからないかを生徒に自覚させて、助言によって主体的な学びに導くことも大切である。



(改善案)

自己評価票

年 組 番 氏名	
1 清少納言の人物像を理解した。	A B C D
2 「枕草子」の成立の背景を理解した。	A B C D
3 漢字や歴史的仮名遣いを正しく読めるようになった。	A B C D
4 口語訳をノートに書きながら内容の理解に努めた。	A B C D
5 語句の意味や用法を理解した。	A B C D
6 「枕草子」に対する関心が深まった。	A B C D
感想（C・Dを付けた場合は、その理由も書いてください。）	
----- ----- -----	

A あてはまる B だいたいあてはまる C あまりあてはまらない D あてはまらない

資料4

館に初めて参りたるころ ()年()組()番 氏名()

次の会話は、誰が誰に対してどのような場面で言った言葉か。

「これは、とあり、かかり。それが、かねが。」

が に

場面

「葛城の神もしばし。」

が に

場面

「これ、放たせ給へ。」

が に

場面

「まな。」

が に

場面

「下りまほしつなりにたらぬ。せらば、はや。夜せりせしへ。」

が に

場面

「今日はなほ参れ。雪に曇りてあらはにもあるまじ。」

が に

場面

「見苦し。そのみやは籠りたらむとする。あくなきまで御前許されたるは、せおほしめすせいに
そあらめ。思ふにたがふはにくきものぞ。」

が に

場面

自己紹介文の例（生徒作品）

私は清少納言です。年は二十八歳。今から十一、二年前の十六、七歳の時に橋則光という人と結婚し、男の子を出産しました。お前は則長、と言うんですよ。そよから、夫の橋則光とは別木、閑白の藤原道隆様の長女で、兼天皇の中宮であつた定子様の所へ出仕するようになります。私の性格は、恥ずかしがりやで内気で、定子様の前では気後れしてしまふんです。だから、初めて定子様の所に行つたころは、お身に取つかないことがたんとあつて泣きたいほどでした。でも、定子様は私にとおもてを遣つてくれて優しい人なんです。そして私のことをとても高く評価してくれておられます。素敵な人です。私は定子様のところに来てよかったです。そよからも定子様とは仲よくやつていきたいと思つています。おつと宮中にも慣れたら、楽しくやつていけそうです。そんなところで私の自己紹介は終わりにします。私のこと、あが、てもらいましたか・・・。

資料6

相互評価票

評価者（ ）（班 氏名）

クラスメートの名前（ ）

（さん）

感心したところ（特に、「本文に描かれた人物像、情景、心情などが自己紹介文に生かされているか」という観点で評価してみよう。）

疑問・質問

* 学習集団によっては、「こうすればもっと良くなる」という項目を設けて改善案を出させるなどして、意見や感想を交換させることで、自分の作品を推敲させる方法も考えられる。

資料7

評価問題

□ 次の文章を読んで後の問に答えなさい。

宮に初めて参りたるころ、ものゝ恥つかしきことの数知らず、涙も落ちぬべければ、夜々参りて、三尺の御几帳の後ろにさぶらぶに、絵など取り出でて見せさせ給ひを、手にてもえさし出づまじつわりなし。「これは、とあり、かかり。それがかれが。」などのたまはず。^b高坏にまゐらせたる御殿油なれば、髪^cの筋なども、なかなか昼よりも鬮証に見えてまばゆけれど、^d愈じて見なとす。いと冷たきころなれば、さし出でさせ給くる御手のほつかに見ゆるが、いみじつ伺ひたる薄紅梅なるは、限りなくめでたしと、見知らぬ里人心地には、^eかかる人こそは世におおしましけれと、驚かるまでそまもり参らする。^d暁にはとく下りなむと急がる。^f葛城の神もしばし。」など仰せらるるを、いかでかはすちかひ御覽せられむとて、なほ伏したれば、御楯もまゐらず。^f女官ども参りて、「これ、放たせ給へ。」など言ふを聞きて、女房の放つを、「まな。」と仰せらるれば、笑ひて帰らぬ。

ものなど問はせ給ひ、のたまはするに、久しつなりぬれば、「下りまほしつなりにたらむ。さらば、はや。夜ざりはとく。」と仰せらる。

ぬざり帰るにや遅きと上げ散らしたるに、雪降りにけり。登花殿の御前は立て部近くてせはし。雪いとをかし。屋つかた、「今日はなほ参れ。雪に曇りてあらはにもあるまし。」など、だひだひ召せば、この厨の^h主も、「見哲し。ぞのみやは籠りたらむとする。あくなきまで御前許されたるは、^hおおほしめすやつこそあらめ。思ふにたがふはにくきもので。」と、ただ急がしに出だしたつれば、あれにもあらぬ心地すれど、参るぞいと苦しき。火焼屋の上に降り積みたるもめつらしつをかし。

御前近くは、例の炭櫃に火こちたくおこして、それにはわざと人もあず。^k上臈御まかなひにさぶらひ給ひけるままに、近づめ給へり。沈の御火桶の梨絵したるにおはします。次の間に長炭櫃にひまなくみたる人々、^l唐衣にき垂れたるほどなど、馴れやすらかなるを見るも、いとつらやまし。御文取り次ぎ、立ち居、行を違ふさまなどのつつまじげならず、もの言ひ、笑わらふ。^lいつの世にか、ちやつに交しらひならむと思ふそくそつつまじき。輿寄りて三、四人さしつどひて絵など見るもあめり。

- 問一 傍線部 a } I の漢字の読みを現代仮名遣いで書きなさい。
- 問二 傍線部 ア 「宮」とは何のことが答えなさい。
- 問三 傍線部 ㄱ } を現代語訳しなさい。
- 問四 傍線部 イ 「伺ひたる」は現代で使われている「伺つ」とは違つ意味である。どのような美しさを指つのか、答えなさい。
- 問五 傍線部 ウ 「かかる人」とは誰のどのような様子を言っているのか、答えなさい。
- 問六 傍線部 エ 「葛城の神もしばし」について、
 (1) 「葛城の神」の読みを現代仮名遣いで書きなさい。
 (2) 「葛城の神」とはどのような神か、答えなさい。
 (3) 「葛城の神もしばし」を省略されている語を補つて現代語訳しなさい。
 (4) これは誰が誰に対してどのような場面で言つた言葉か、答えなさい。
- 問七 傍線部 オ 「まな」について、
 (1) 現代語訳しなさい。
 (2) これは誰が誰に対してどのような場面で言つた言葉か、答えなさい。
 (3) この言葉からこの言葉を言つた人のどのような人柄が想像されるか、答えなさい。
- 問八 傍線部 カ 「ぬざり帰る」とはどのようにすることが、答えなさい。
- 問九 傍線部 キ は「そのようにお思いになるわけがあるのでしょうか」という意味である。「そのように」とはどのようなのか、答えなさい。
- 問十 傍線部 ク 「いつの世にか」とあるが、作者はどのようにになりたいと願っているのか、答えなさい。

□ 「枕草子」の作者について述べた次の文章の空欄に適する語を入れなさい。ただし A・B・C・D・F は人名を記し、E・G は後の語群から選びなさい。

作者（ A ）の父は清原元輔で、後撰和歌集の撰者である。代々学者歌人の家柄であつた。十六、七歳の時に結婚して男子を出産したが、その後夫と別れ、閨白（ B ）の長女で（ C ）天皇の中宮であつた（ D ）のところへ出仕した。（ E ）について深い教養があり、当時タイハル關係の（ F ）から、「才をひけらかす」と批判されている。父や曾祖父の得意だつた（ G ）はあまり得意ではなかつた。中宮の死去とともに宮中を去り、晩年の生活は明るいものではなかつたといわれる。

- | | | | | | |
|----|----|----|----|----|----|
| 絵画 | 書道 | 漢籍 | 和歌 | 茶道 | 華道 |
|----|----|----|----|----|----|

資料 8

評価問題の正解率と分析結果

指導時間

問一	a	90%	b	90%	c	100%	d	90%	e	100%	f	70%	
	g	80%	h	80%	i	90%	j	100%	k	40%	l	40%	
問二	ア	100%											
問三	90%				70%								
	80%				50%								
	30%				30%				← 第2～5時				
	60%				30%								
	30%				20%								
	30%				50%								
	20%												
問四	イ	80%											
問五	ウ	30%											
問六	(1)	90%	(2)	50%									
	(3)	40%											
	(4)	誰が	100%	誰に	90%	場面	70%						← 第6時
問七	(1)	90%											
	(2)	誰が	60%	誰に	80%	場面	80%						
	(3)	人柄 80%											
問八	カ	50%											← 第2～5時
問九	キ	30%											← 第6時
問十	ク	50%											← 第2～5時
問十一	A	100%	B	30%	C	80%	D	80%					← 第1時
	E	80%	F	90%	G	80%							

分析結果

- 問一 読みの問題（知識・理解） 全平均81%。k「^{じょうろう}上臈」、l「^{からぎぬ}唐衣」が各40%と低く、なお指導の余地はあるが、全体的には良好な結果である。小テストで形成的評価を行った効果と思われる。
- 問三 古語の意味を記述する問題（知識・理解） 全平均45%。指導の工夫及び出題方法の工夫が必要である。
- 問五、問六（2）・（3）、問八、問九、問十（主に読む能力）の正解率が低い。いずれも授業中に指導したが、ワークシート等には同じ設定で記入する項目がなかったため、正解率が下がったと思われる。こうした実態を踏まえて、ノートを取り方の指導や、ワークシートの工夫に生かすべきことが明らかになった。
- 問六、問七は第六時の指導を踏まえた問題（読む能力）である。全11問の平均は75%であり、全体としては良好な結果である。
- 文学史の問題 全平均77%。B（正解「藤原道隆」）のみ30%と低いですが、全体的によくできている。ワークシートでの指導の効果により、学習内容の定着が図られたものと思われる。

全て指導の結果を踏まえて出題した。生徒も学習の成果を概ね発揮できたようである。一部に正解率の低い問題もあったが、分析の結果明らかになった課題を、今後の指導に生かすことで指導と評価の一体化を図りたい。